

1 自己評価結果に対する学校関係者評価

評価領域	本年度の重点目標	具体的取組(具体的な指標等)	自己評価		学校関係者評価委員会の意見	来年度に向けて(改善方策等)
			成果	課題		
主体的な学び	知的好奇心を刺激する授業の工夫	<ul style="list-style-type: none"> 校内研究を活用した知的好奇心を刺激するための導入の工夫 児童自身が活動を振り返る場の設定 「学んだことを生かす場」の設定を意識した授業づくり ICTの活用等により「わかる、楽しい授業」に向けた授業改善の推進 少人数指導や習熟度別指導などによる指導方法や学習形態の工夫 	<ul style="list-style-type: none"> 授業で行った学習の成果を他学年で紹介する活動を昨年度より行い、今年度は活動の定着化が図れた。今後、さらに活動を活性化させるためには、紹介する側は目的や表現方法の向上、また受け取る側の見方や評価する観点を教員が児童に考えさせる取り組みが重要であると考え。 ICTの積極的な活用については、全学年で行った、ドリルパークやオクリンクプラス等のコンテンツを活用し、わかる、楽しい授業を目指して実践を行った。ICTの活用によって、意欲・関心や内容の定着度合い等の活用効果を学力向上委員会やICT担当教員と検証し、次年度の取り組みにつなげる。 算数において、学年教科支援教員の活用により少人数指導に取り組んだ。しかし、習熟度別指導については、教員の数や場所が足りないことや、時間割の工夫が必要であり、学校全体で実践につなげるための方法を考えていくことが課題である。 	<ul style="list-style-type: none"> きめ細やかな指導の実践と、人が足りない現状は矛盾していると感じる。 業務効率を上げる取り組み(ペーパーレス化、ICT活用)を実施する必要がある。 学校評価アンケートのタブレット活用については、保護者と教職員の受け取り方が違うのが当たり前の中、項目として適正なのか疑問である。 タブレットの活用については、教員と保護者の求めているものが違うのではないかと感じる。 学んだことを生かす場については、授業で取り入れており、努力がみられる。しかし、学んだ事を生かして、さらに考える場が少ない。新しい取り組みではなく、学んだ事を使う授業の実践を教員は意識することが必要。 	<ul style="list-style-type: none"> 学んだことを生かす場の設定とともに、既習を活かす意識を実感できる授業づくり。 習熟度別学習等、個に応じた指導を目指した組織づくりや人材活用。 家庭学習におけるタブレットの有効活用についての検討 	
自他を尊重する心	自己肯定感を高める生徒指導の機能を生かしたわかる授業の実践 学年・学級の枠にとらわれない、全教職員による温かみのある指導	<ul style="list-style-type: none"> 教育活動全体をととした道徳的実践力の育成 生活アンケート、職員打ち合わせにおける情報共有の活用 ヒドワンカリキュラム(潜在的教育効果)を理解した教職員自身の言動、姿勢の徹底 挨拶の推進 	<ul style="list-style-type: none"> 学校評価アンケートでは、「良いところを見つけること」「相手の気持ちを考えて関わること」「感謝の気持ちを持つこと」の項目では、評価が高く、他者への温かい関わりを意識できている児童が多い。しかし、他者の良いところを見つけても、伝えるところまではできていない。自己肯定感を高めるためには、思いを伝えよう環境や雰囲気づくりを引き続き教育活動の中で行っていく。 朝の挨拶運動では、生活安全委員会を中心に毎週月曜日に行っている。教職員も、毎朝昇降口で児童の登校を見守りながら挨拶を行い、率先垂範に努めているが、高学年児童の意識は高まってはいないように感じる。今後も挨拶の目的や重要性を児童に伝えながら、推進していく。 引き続き教職員の児童に寄り添った言動や姿勢の徹底を努めていく。 登校渋りの児童が複数いる。渋りの原因や状況が個々の児童で違うため、担任だけでなく、学年主任や学年教科支援教員、学習支援室活用推進教員、スクールカウンセラー等、全職員で対応しているが、職員の人数に限りがあるため、対応に苦慮している。きめ細やかに支援をするための方法や組織体制の構築を今後も行っていく。 	<ul style="list-style-type: none"> 休み時間を活用してはどうか、授業だけでなく、伝える力の向上やコミュニケーションの時間として工夫してはどうか。 学校評価アンケートで教員に相談したいとの結果ではあるが、子どもから大人へは、相談が難しい状況もあると感じる。教員限定ではなく、友達に相談できることも含めてもいいのではないかと感じる。 伝えよう力を高めるためには、教員が場面や展開を授業の中で意図的に作っていくことが必要。 今の子どもたちは、生活経験が薄く(雨に濡れる、お茶を沸かす等)ため、経験を学ぶに生かすことができていない。 コロナウイルスによって、伝えあいや認めあう場面が少なくなっている。授業だけでなく行事の中で、伝えあう、認めあう場面を作っていくことが大切である。 	<ul style="list-style-type: none"> 2か月一度の生活アンケートの実施継続、結果活用の推進。 全学年ローテーション授業による道徳指導の充実及び、保護者への授業公開 委員会活動等の自主的活動を基盤にした、挨拶運動の継続推進 教育相談の充実 	
健やかな体	児童自身が健康や安全に気をつけることができるための指導 外遊びの奨励	<ul style="list-style-type: none"> 感染症の状況把握と速やかな対応をととした拡大防止 生徒指導委員会との連携による学校生活における安全指導の徹底 体育の日常化に向けた強化月間の取組の充実 体力向上推進委員会を活用した、外遊びの推進 	<ul style="list-style-type: none"> 保護者への感染症に関する情報提供を速やかに行い、家庭でも児童に対する注意喚起の協力を求めた。校内では、感染者数の状況により、給食の食べ方や行事の実施方法を工夫し感染拡大防止に努めた。 体力向上推進委員会主催の長縄や短縄活動では、記録を表彰したり、技能を全校朝会で披露したりするなど、活動を通して外遊びの活性化を図ることができた。 今年度けがが多く発生している。児童、教職員ともに日常生活における安全意識の向上を安全指導部や生徒指導委員会を中心に働きかける取り組みが必要である。また、教職員だけで安全点検を行っているが、PTAや学校地域連携運営協議会委員等、第三者の目線で点検の必要性を感じている。 	<ul style="list-style-type: none"> 休み時間の過ごし方も大事である。授業で学んだ事を生かす場として活用してはどうか。 今の子どもたちは、習い事も特化(サッカー、トランポリン等)したものをやっている子が多いため、学校では特化した動きに限定しないものを取り入れてほしい。 今の子どもたちは、大人が見ている時間が増えている分、けがをする前に大人が子どもを助けてしまっている傾向があるため、けがをする経験が少ないのではないかと感じる。 	<ul style="list-style-type: none"> 外遊びの奨励 運動の日常化に向けて、休み時間を活用した強化月間の取り組みの継続 委員会活動等を活用した児童主体による体育的活動の充実 避難訓練や外部講師による授業を活用した、発達段階に応じた、体や命について学ぶ機会の充実 	
豊かなかかわり	異学年交流など、他者とかかわる教育活動の推進 教育活動の見える化の推進	<ul style="list-style-type: none"> 総合的な学習の時間や特別活動の充実 地域学習や社会人講師による授業の充実 学校だよりやホームページなどによる教育活動の情報発信の強化 	<ul style="list-style-type: none"> 保護者アンケートでは、情報発信に関する項目は肯定的評価が94.5%と高い評価で推移している。ホームページや学校だより、廊下掲示を通じて児童の様子をタイムリーに発信する取り組み、さらに、キッズビューの活用も併せて行った結果だと考える。今後は、学校教育活動への保護者の協力が得られるよう、内容を精査し情報発信を検討していく。 「児童と地域とかかわり」に関する項目は、依然評価が低い傾向となっている。地域人材の協力を児童により意識させるとともに、地域人材を積極的に活用していきたい。また、学校の教育活動だけでなく、各家庭の地域活動への参加を行うことも、児童の地域への所属感の向上につながるのではないかと考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校で協力が欲しい事などを、地域に理解してもらうためには、「どのような場面で、何を、どのように」と具体的な提示があるとよい。公民館も学校へ協力したいと思っている。地域の高齢の方の協力もあるとよい。 年齢が低いうちに心の傷等にも耐えられる経験があると良い。 	<ul style="list-style-type: none"> きょうだい学年の交流や幼保小中連携をととした、異年齢交流の継続と振り返りの充実 教育活動の「見える化」を意識した情報発信 地域の社会人講師や外部指導者を活用した多様な体験学習の充実 	
特別支援教育の充実	一人一人の児童理解に基づく個に応じた指導、子どもたちの心に寄り添った指導 通常学級と特別支援学級との交流及び共同学習の推進	<ul style="list-style-type: none"> 生徒指導委員会、特別支援教育推進委員会 一人一人の持てる力を最大限に伸ばす環境づくり 個別的教育計画、個別の指導計画の作成をとおした保護者との共通理解と関係機関との連携によるきめ細かな支援 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒指導委員会、特別支援教育推進委員会が情報共有及び指導体制を整え、チームで取り組むことができた。現在、2つの委員会が別々で話し合いをもっているが、協議内容によっては2つの委員会にまたがる内容もあるため、学期に1回程度は合同会議することで、より指導、支援体制の強化が図れるのではないかと考える。 引き続き個別的教育計画、個別の指導計画の作成をとおした保護者との共通理解は定期的かつ、確実に行えるように、特別支援教育推進委員会で確認しながら進めていく。ケース会議を適宜行い、関係機関や学校、家庭と連携し、児童へのきめ細かな支援を行っていく。 	<ul style="list-style-type: none"> 特別支援学級の交流は、交流クラスに行くだけでなく、通常級の児童がけやき学級に遊びに来るといった交流も見られ、良い取り組みである。 特別支援については、担任を始め全職員でよくやっている。子どもたちの持つ力を引き出している。けやき学級の子どもたちも、素晴らしい力が育っている。 個別最適な学びが一番実践されているのは特別支援学級ではないかと感じている。 	<ul style="list-style-type: none"> 特別支援学級と通常学級の交流及び共同学習の充実 生徒指導委員会と特別支援教育推進委員会の組織的な運営及び連携の強化 個別的教育支援計画、個別の指導計画作成を通じた保護者との共通理解及び連携 	
小中連携	幼児期から中学生まで12年～15年を見通して、地域を巻き込んだ「チーム日の出」で子どもを育てる。	<ul style="list-style-type: none"> 幼・保・小・中相互の交流活動の充実 系統的な学習指導、生徒指導を充実させるための園小中連携会議の充実 	<ul style="list-style-type: none"> 幼保小中の交流活動では、交流することだけに重きをおくのではなく、交流後の振り返りを重要視した。園小中連携会議においても、振り返りの実践を意識するよう働きかけを行った結果、各園小中で振り返りの充実が見られた。来年度活動の目的、振り返り活動、活動の効果、持続可能な内容等を中学校区で検討し実践につなげていく。 	<ul style="list-style-type: none"> 小学校の課題は、園の課題でもあるとらえている。 	<ul style="list-style-type: none"> グランドデザインを基盤とした中学校区としての目指す子ども像の共有 相互授業(保育)参観、情報交換の推進 園児、児童、生徒の既存の交流活動内容の充実及び振り返り方法の工夫 	

2 授業、行事、施設等に関する学校関係者評価委員の意見・感想

・6年生を送る会を見ていて、児童が力をもっていると感じる。 ・6年生を送る会では児童同士が、認め合う場がしっかりとできていた。
・職員任用については、様式6号に記載してある通り、朝の登校支援サポートの人材を求める内容を提出していく。